

氏名：菅 実花 役職：准教授 後期より M1 学年担当  
プロジェクト：Extreme Biologies  
担当授業：制作演習 C、メディア表現特論 D、総合学Ⅱ

## 〈活動の概要〉



制作演習 C の様子



菅実花《となりにすわろう》2024

授業は実技・座学の両方で、リサーチから作品制作への展開を促すことを考えて実施した。制作演習 C では「光の現象を使った作品の制作」課題を行なった。メディア表現特論 D では「写真史（1820～1930 年代の写真表現）」「見えないものを可視化する魔術的装置としての写真（1830～1920 年代）」のレクチャーを行なった。総合学Ⅱでは、大久保先生と合同で「アートと身体」、松井先生と合同で「分析理論としてのジェンダー論」を担当した。「ジェンダー」回後に学生が立ち上げた自主勉強会「言語とジェンダー」にも呼ばれ、卒展イベントへと展開している。参加プロジェクトの Extreme Biologies では、3 回のレクチャー及びフィールドワークや実験日の記録を担当した。後期より M1 学年担当になったので、卒展や年次発表の調整等を行った。

個人研究に関しては、フルスペクトルカメラを用いた写真作品、ツバメを取材した映像・ドローイング作品の制作、2 回の展覧会と、所属学会での若手フォーラムへの登壇等を行った。科研費研究のアイトラッキンググラスを用いた見分けの研究は初年度なので、展覧会会場にて予備実験を行った。芸術実践論文に関する研究では、先行研究のうちの国際的な大学の比較を中心にリサーチを進めた。

## 〈学内での活動〉



OPEN HOUSE 展示風景

### プロジェクト：Extreme Biologies

クマムシの採集・観察など実験を行う日を中心にフィールドワークや展示など授業の写真記録を行っている。レクチャーは「生殖技術史」「フランケンシュタイン」「動物と共同するアートは非人間中心主義と言えるか？」を担当した。オープンハウスでのプロジェクト展示ではカストロ先生、前林先生とともに展示・照明設計を行った。

### IAMAS 紀要執筆

研究ノート「魂を見出すメディアとしての写真」を寄稿した。19 世紀の写真文化と 2019 年に原爆の図丸木美術館で行った個展をもとに、自作を論の根拠とする芸術実践論文としてまとめた。芸術実践論文研究で仮定した一つの類型を踏まえて、文字数やパラグラフ数のコントロールを試行した。

### ワーキンググループ・勉強会

前期に小林茂先生からの呼びかけで、2023 年度に行った芸術実践論文の研究から、美術実技系博士論文について先行研究の紹介し、論点の共有と国際的な評価基準の確認を行った。

## 〈学外での活動〉



### 人形玩具学会

日本人形玩具学会第 36 回総会・研究発表大会：第 3 回若手フォーラム「人形・玩具表象とジェンダー」

人形・玩具が人間中心主義・男性中心主義社会に対してどのような批評性を持ちうるかをテーマにプレゼン、ディスカッションを行った。

主催：一般社団法人日本人形玩具学会

会場：慶應義塾大学

日時：2024 年 6 月 29 日 10:00-18:00

司会：山中海瑠、登壇：みょうじなまえ、菅実花、西原志保、和田千寛

## 〈学外での活動〉



### 展覧会「PROTOPIA」

菅実花と神楽岡久美による2人展「PROTOPIA」を開催した。神楽岡は「美力」を軸に、社会的・文化的な身体像をリサーチし、立体作品やドローイングを通じて、美的価値と身体改造の関係を探究。菅は「機械の眼」を題材に、赤外線や紫外線を捉えた写真作品や、ツバメをモチーフにした映像とドローイングを展開した。ケヴィン・ケリーの概念「プロトピア」を背景に、ユートピアでもディストピアでもない、近未来の姿を描き出した。

会期：2024年8月3日～18日

会場：Gallery 10[TOH]（東京）

作家：神楽岡久美、菅実花



視線計測のモニター画面

### 科研費若手研究「アイトラッキング調査による人形写真の鑑賞の分析に基づく類似的表象の見分けの研究」2024年度～2026年度

初年度なので、6名を対象に予備実験を展覧会「PROTOPIA」で実施し、測定精度の検証を行った。



Tech Bias 展示風景

### 展覧会「Tech Bias —テクノロジーはバイアスを解決できるのか？」東京大学×ソニーグループ 越境的未来共創社会連携講座

バイアスに対する理解を深めるとともに、テクノロジーがどのようにして公正な社会を実現するための力となり得るかを示すことをテーマに、東京大学、ソニーグループの混成プロジェクトチームによる展示と、招待作家の展示を行った。

会期：2024年11月23日～25日

会場：東京大学情報学環オープンスタジオ

作家：高橋宙照、Yating Dai、山本恭輔、Hao Cao、松本翔太、菅野尚子／Tang Muxuan、劉カイウェン、白木美幸、香川舞衣、百田竹虎、増田徹、甲林勇輝／李若琪、毛雲帆、西澤巧、梅津幹、熊暁、小松尚平、石坂彰、中岡尚哉、管俊青／江連千佳、浅井智佳子、三浦勝典、佐倉玲、三森亮、明石穂紀／菅実花（招待展示）／リブ（招待展示）／ソニー（株）、（株）QDレーザ（招待展示）／（株）ソニー・ミュージックエンタテインメント（招待展示）



### トークイベント「鏡としてのアート」

井村一登個展「折衷案がもたらすNレンマ」開催中のKANA KAWANISHI GALLERYにて、二人の作家の鏡を使った作品制作という共通点から、アートの中で「鏡」が持ちうる役割についての鼎談を行った。

登壇者：井村一登（アーティスト）×菅実花（アーティスト）×岩垂なつき（美術批評）

会場：KANA KAWANISHI GALLERY

日時：2024年4月13日 17:00-19:00

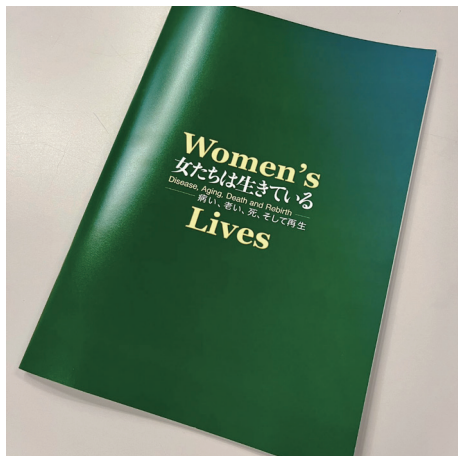


### Web連載 ラブドールソウゾウロン「NeWORLD」

2023年11月より連載している関根麻里恵×菅実花の往復書簡。ポスト・ヒューマンや人形をモチーフにした映画・小説を踏まえた人形論を展開した。人形やロボットを含めた女性の表象について身体を軸に考えることをテーマに連載している。2024年4月から12月の執筆に該当するのは第8回から第12回（うち私の担当は3回）。

執筆：関根麻里恵（表象文化論）、菅実花（美術作家）

〈学外での活動〉



展覧会記録集制作

「Women's Lives 女たちは生きている一病い、老い、死、そして再生」、さいたま国際芸術祭 2023 市民プロジェクト「創発 in さいたま」、プラザノースギャラリー

2023 年度に行った展覧会の記録冊子を発行した。私は冊子デザイン、制作を担当した(2023 年に撮影した展覧会記録写真含む)。完成冊子は 2024 年 9 月 1 日に発行された。

キュレーター：小勝禮子 作家：松下誠子、一条美由紀、岸かおる、山岡さ希子、菅実花、本間メイ、地主麻衣子、須恵朋子

兼任校、特別講義

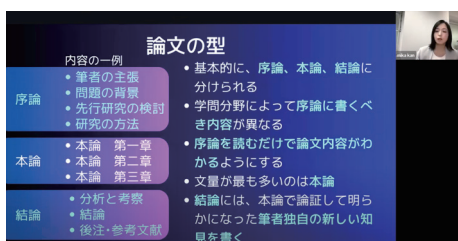
京都芸術大学大学院（通信教育）写真・映像領域 特任准教授として勤務している。通常授業では制作アドバイスをし、レクチャーは「芸術実践論文」「シンディ・シャーマンとフェミニズム」「台湾現代アートにおける写真・映像」を行った。修士論文指導としては論文添削を行った。

11 月 5 日に学部の写真通信コース主催で特別講義「芸術実践論文入門」を開催した。全ての専攻、学年が聴講可能な講義で、Youtube でもアーカイブが公開された。

女子美術大学メディア表現領域 3 年生へのゲストレクチャー

自身が衝撃を受けた社会的な出来事から作品を発想することについてをテーマに、2 コマのみのレクチャーを行った。

2024 年 7 月 2 日 13:20-16:30



特別授業「芸術実践論文入門」



2024 台北摄影上桌「PHOTO GO」審査員

台北で行われた 45 歳以下のコンテンポラリーフォトのコンペティションの審査員を務めた。

主催：1 IMAGE ART / 一影像

期間：2024 年 11 月 11 日～12 月 22 日

審査員：黄建亮、陳伯義、鄧博仁、顏鵬峻、菅實花、劉東佩、張哲裕、李毓琪、徐聖淵